

平成29年3月10日

目黒区立第八中学校

校長 飯野博史

平成29年度 学校運営改善プラン

1 第三者評価の実施内容

(1) 第1回学校訪問 平成28年9月13日(火) 午前9時20分～午後4時00分

・校長、主任養護教諭、PTA会長を対象としたヒアリング

(2) 第2回学校訪問 平成28年9月20日(火) 午前9時20分～午後3時30分

・主幹教諭、学校評議員、副校長を対象としたヒアリング

・教育活動の参観

・評価者から学校への助言

2 評価者

帝京科学大学教職センター長 教授 小池和夫

宇都宮海星女子学院中学校・高等学校長 齋藤直子

3 今後の取り組み

評価内容		○今後の具体的な取組
前年度の 学校評価 について	ア 四者による学校評価アンケート結果を踏まえた学校の自己評価の内容	- 本校の特色として取り組んできた人権教育の推進について、生徒、保護者から高い評価を得ることができた。思いやりの心、コミュニケーション能力が育ち、いじめ件数の減少、学力向上へとつながった。今年度で研究指定は終了するが、組織的な指導体制を確立し、人権教育を本校の特色としてさらに充実させていく。 - 生徒による授業評価や振り返り学習を全教科で実施し、指導の工夫・改善にいかした。その結果、授業に関する肯定的評価は約88%であった。ICTの活用により、効率的な指導ができるようになった。次期学習指導要領を視野に入れた取り組みをしていく。
	イ 学校関係者評価結果に基づいた学校運営改善の計画内容	- 人権についての研究を進める中で、教職員の人権感覚が高まった。目指す子供像、保護者の願いを的確に受け止め、人権感覚を基調とした教育活動を展開していく。 - 各主任を中心に学年、分掌が組織的に機能するようになった。企画会等を通して、校長、副校長、主幹教諭というラインを意識させ、学校経営方針のさらなる浸透を図っていく。
学校評価結果を踏まえた学校運営の改善状況について	ア 教育課程の実施状況	- 日常的な授業観察、週ごとの指導計画の活用などにより、適正に教育課程の管理を行った。目の前の子供たちにどんな力を付けさせる必要があるのか、そのためにはどんな指導法が適切なのかを把握し、次期学習指導要領を視野に入れながら、全教科で組織的に授業改善に取り組んでいく。 - 適正な評価・評定に向けて、評価材料をできるだけたくさん収集するとともに、きめ細かく個々の生徒への助言・指導に努めるなど、指導と評価の一体化に努める。

	イ 組織運営等の状況	・人権教育についての研究、実践を契機として、教職員の学校運営参加意識が高まり、個々の役割を自覚し、組織が活性化するようになった。よい雰囲気を持続していくために、各主任の経営参画意欲をさらに高めていく。管理職の「まかせる ほめる うけとめる」姿勢を大切にし、人材育成と組織の活性化を図る。 ・組織的に学力向上を目指す。そのために、今まで行ってきた「学習カード（振り返りカード）」を継続して全教科で行う。数学科と英語科で実施している習熟度別授業の成果や課題を全教員が共有し、各自の指導に役立てる。さらに、次期学習指導要領を視野に入れ、指導内容・方法の工夫改善に取り組み、「主体的・対話的で深い学び」を実践していく。
	ウ 家庭や地域との連携状況	・保護者に対して「親切、誠実、丁寧」な対応に努めた。きめ細かな連絡等により、保護者からは概ね良好な評価を得ることができた。保護者対象の学校評価アンケートの中に「わからない」と答える項目が多く、保護者に学校の様子を伝えることが必要と感じるとともに、保護者の方にも学校をよく知り、積極的に関わる努力をお願いしたい。 ・地域行事に生徒たちを積極的に参加させた。学校ではなかなかできない体験を通して自信をもたせるとともに、地域との交流も深まった。地域行事を年間行事予定に組み込み、さらに計画的に地域行事に参加させていく。
特記事項	・特色ある教育活動 ・特筆すべき優れた取組	・東京都教育委員会人権尊重教育推進校として、人権教育について研究、実践に取り組んできた。生徒・保護者・地域からも高い評価を受けることができた。人権教育に計画的・組織的に取り組むことにより、生徒、教職員、学校がよい方向に確実に変わってきたことを実感する。引き続き人権教育に取り組み、本校の特色の一つとして定着させていく。 ・朝の読書が定着し、読書好きな生徒が増えた。毎日の「給食だより」により、食に対する関心が高まった。募金活動、敬老の日の手紙、特別支援学級E組との交流・共同学習等、八中の特色として継続して取り組む。放課後学習教室、土曜補習教室に参加する生徒を増やしていくことが課題である。
	・学校間連携の状況	・「第八中学校区小・中連携子ども育成プラン」に基づいて、大岡山小との連携を進める。「なぜ連携が必要なのか」「どんな子供を育てるのか」「そのためにはどんな連携が必要なのか」改めて基本に立ち返り、連携を深めていく。 ・教科指導面での連携が必要である。定期的な研修会だけでなく、教科担当者が随時それぞれの学校に出向き、お互いの授業を見合うなど実践していく。 ・夏季休業中の部活動体験は近隣の小学生がたくさん参加し、好評であった。今後も児童・生徒が交流する場面を多く設定する。